



『新口村』の孫右衛門

大 西 重 孝
齋 藤 清 二 郎

かしら、小道具解説並繪

九月上旬、京都南座に出開帳の文樂では古靱太夫、清六にて「新口村」が出た。昭和十四年三月、榮三師初役の孫右衛門が好評であつたのを病氣の爲め観ることの出来なかつた筆者は今回の機会をのがすまいと、京都に飛んでその素描を試みた。人形出遣ひ、孫右衛門は榮三（左手、門造、足、紋之助）、忠兵衛は光之助、梅川は文五郎、忠三女房は榮三郎といふ配役。

本手いつものところに屋體、正面納戸口に暖簾、上手襖をしきつて一間、首の高さにれんじ窓、下手土間、板戸の外は雪に埋れた野景色、下手寄りに「新口村」と記した道しるべが立つてゐる。

人目を忍ぶ身は一間に姿を潜めて、僅かにれんじ窓から忠兵衛が顔をのぞかせて、同じく顔を並べた梅川に道場参りの村の人々の話を聞かせる。その人々が杜絶えると、暫くして忠兵衛は生みの親、孫右衛門の姿を認めて「是が今生のおい

とま乞ひ」と、手を合すと、梅川も「今がお顔の見初めの見納め」と、窓の椅子にとりついて「未來で孝行いたします」と、同じく手を合せ、障子をとざす。靜かに雪おろしを聞かせて、雪が降つて来る。

「孫右衛門は老足の」が孫右衛門の出、下手横幕を引いて右に杖（小道具圖解参照）をつき、左に澁蛇の目の傘（小道具圖解参照）をさしかけて、雪道に惱む危い足取りで、現れて「休み、休み」の息の間で、歩みを止めて杖を持つた右手を後の腰骨に當て、伸びをして「門をすぎ」で、再び杖をついて真中近くへ進むと「野口の溝の薄氷」となつて、氷の張つた水溜りを越えるると爪先を上げるやうに要領深く足を運ぶ「花緒は切れて横様にどうと轉べば」で、よろ／＼となり、傘を放して、右の杖は握つたまゝ倒れる。これより先、一間を出た梅川が「あはて走り出で」下手から抱き起し、傘を後

へ片寄せて「どこも痛みは致しませぬか」と、尋ね乍ら、手

の邊りを拂ふ。

拭で孫右衛門のひざの邊りを拭く。「お年寄りの危いこと」といははる梅川の姿を孫右衛門は小首を傾けて不審さうに眺めてゐる。梅川は「お足も洗ひ」といつて、花緒の切れた下駄（小道具圖解参照）を見付けて「花緒も上げて上げませう」と、右手に下駄を拾つて「マア、こちへ」と、孫右衛門の手をとつて土間へ誘ひ入れ、上り框のところへ腰をかけさせるのが「腰膝撫でゝいたはれば」で、尙も手拭を以て裾、膝

「孫右衛門は氣の毒さ」で、孫右衛門は右手を頂くやうに前に出して「ア、戴きます」と頭を下げ、もう一度「戴きます」と頭を下げる。「どなたか知らぬが忝けない、お蔭で怪我も致しませなんだ」と云つて、身體を右に、左に傾けて梅川の姿をつく／＼見て「ア、若い女中のお優しい、年寄と思召して、嫁子もならぬ御介抱……ア、もう／＼」と、右手を出して軽く振り「手を洗はしやつて下さりませ」と兩手で梅

役名	かしら	髪	備考
龜屋忠兵衛	源太	油付町人髷	
傾城梅川	新造	油付漬し島田	
忠三女房	お福	油付島田	
親孫右衛門	定の進	胡麻油付町人髷	丸目ものの端役 端役なり三枚目系統の婆にて良し
樋口水右衛門	端役	地毛のひつく／＼	
傳が婆	端役	胡麻のひつく／＼	
鶴掛藤兵衛	端役	胡麻のひつく／＼	
置頭	端役	胡麻油付町人髷 大黒頭巾付	「正宗」型のおやちの端役
針立道庵	端役	坊主	「定の進」型のおやちの端役
八右衛門	端役	地毛のひつく／＼	
捕手小頭	端役	油付武士髷	
古手買	つめ	油付武士髷	「檢非違使」型の端役

川の手を上げさせ、尙も膝を撫でやうとするので「手を洗はしやつて……」と、再び手を上げさせ「下さりませ」となる「幸ひ庭に藁は澤山」と、土間の隅を指差し「花緒はわしが上げます」と、懷中から鼻紙（小道具圖解參照）をとり出すと梅川は「申し爰によい紙がござんす」と、自分の延紙（小道具圖解參照）をとり出すので、孫右衛門は、自分の鼻紙を持つた手をそのまゝ引込めせず、キョトンと見てゐて、やがて懷中に仕舞ふ。「延紙引割くその手許」で、梅川を見やり懷中から眼鏡（小道具圖解參照）を出して目にかけて、花緒をすげ替へてゐる梅川の手許をジツと見て「こゝら邊りに」正面向ふを見やり「見馴れぬ女中」梅川を指差し「どなたなれば懇ろに」上半身を前に傾けて「して下さります」と尙も梅川を見ると、梅川は顔を上げて下手へそむけるのが「梅川いと胸つばらしく」である。

梅川は「ハイ私は……」と云ひかけて口をつむり立上るの
で、孫右衛門も一緒に立上つて座敷に上ると、梅川は「旅の者」と云ひ乍ら後について上り、下手に向ひ合つて坐る。

「私の舅の親父様、丁度お前の年配で、恰好も生寫し、外の人に
する奉公とはさら／＼もつて存じませぬ。お年寄られた舅御の臥
悩みのだきかゝへ」といふのを、膝に手をおいて聞いてゐた孫
右衛門は、連れの男でも居るのかと尋ねる心で上手を窺ふこと
あり、顔を正面へ戻して伏せて聞いてゐるが、

「孝行は嫁の役」の詞で、眼鏡をはづして仕舞ふ。梅川は「さぞ連合は飛立つやうにござりましよ」と、トンと立上つて、上手の間を見込むので、孫右衛門は坐つたまゝ、梅川の姿を見上げ、つり込まれて一間の方へ首をひねる。梅川は坐つて「その紙と此紙」と云ふので、以前の鼻紙をとり出しこの紙をどうするかといった氣持ちで、自分の紙を見るが梅川のとり出した延紙と取替へられ「私が申しうけ」といふ梅川の詞の間に、その受取つた紙を見て、そして顔を上げて梅川を見やる。正面となつて、延紙を鼻先へ持つて来て艶かしい匂ひに、思はず紙を右へ遠けて顔を左へそむけ、「連合の肌につけさせて」のあたりで、もう一度にほつて見て、今度は紙を左へ遠け、顔を右へそむける。やがて延紙をわきに仕舞ひ兩手を膝におくと、梅川は「爺御に似た親父様の體にさせたくござんす」と、孫右衛門と取替へた紙を胸に抱き、トン／＼と下手斜に身をそむけて、泣き伏す。

「涙にそれと知られけり」で、正面となつた孫右衛門は、下手へ振返つて梅川の涙にむせぶ姿を見て、「詞の端に、さては……」と、上手の間の方へ首をひねり「そうか」と、再び梅川を見返り、右手で指差して、そのまゝ、顔を上手へそむける。「盡きぬ涙を押し隠し」で、力なく梅川の方に向き直り「フウこなたの舅に、此親父が」自分を指差し「似たといふ孝行か」と優しく首を傾けて「ハ、嬉しうござる」と、

右手を頂いて「が、腹が立ちますわい」と、その右手を前に突出して、顔を上へそむけ、顔を正面に戻して力一杯、身体をふるはせる。「わしも年たけたゆめを、様子あつて久離切り、大阪へ養子にやつたが、傾城といふ魔がさして、人の金を」左の掌を右の指先で二度指して「盗んだとやら、あげくに所を走つた噂、十七軒の飛脚屋仲間」右手を前に出して右へ流し「此の大和は生國なれば、隠し目付、或は順禮古手買」右手を右斜前に押へるやうに出し「節李候に迄身をやつし」同じく左手を前に出し「此の在所は詮議最中」と、軽く左手を上にかざす。「誰故なれば、其の傾城の……」右手で梅川を指差し、そのまゝ上手へ顔をそむけて、「嫁御故」と、力なく面を伏せ、涙を押へる。「盗みする子は憎うなうて」右手を前に、二度押へるやうに動かし「縄かける人が恨めしい」と、正面向ふを二度突くやうに指差し、梅川を見て氣を換へ「……とは、このこと」と、力なく首を垂れて涙を押へる。

「久離切つた」右手を上にかざしてから斬る形に下し「親子なれば、よからうが、悪からうが、構はぬことは思へども、大阪へ養子に行つて」正面向ふを見やり「利發で器用で身を持つて、身代もよう仕上げた」右手を前に出して動かし「あのやうな子を勘當した」向ふを見乍ら膝を進め「親は大きな白痴者」と、右手を前に出して靜かに振つてから、首を

垂れ「指差され、笑はれたら」向ふを指差し「其の嬉しさは」胸を二度撫で下し「……どうあらう」と、右手を目に當て、首を垂れる。「今にも」下手を見やり「捜し出され、縄かゝつて」左の掌を右指先で差し「引るゝ時、孫右衛門は目水晶、よう勘當した、出かしたと褒められるのが……」右手を前に出して震はせ、もう一度「褒められるのが」と右手を震はせ、梅川を見て「悲しうござる」とその手を目に當て、面を伏せ「それを思へば一日も早う往生おすくひ」と、肩衣を脱いで兩手にとつて頂き「拜み願ふは今參る如來様御開山」と、云つて下手に向いて「佛に嘘がつかれうか」と、身体を震はせ「どうとひれ伏しもだへ泣き」で、トン／＼と上手に身をそむけ、肩衣を目に當て泣き伏す。忠兵衛は窓の障を明けて伏し拜む。

「尙も涙を押拭ひ」で、孫右衛門は肩衣を下において身體を起し、上手の一間に向つて「様子聞いたか、聞かぬか知らぬが、養ひ親の妙閑殿」と、顔を正面に向けて右手で向ふを指差し「一昨日牢に入れられたげな」と、下手の梅川を見返る。忠兵衛と共に「エツ」と驚いた梅川は思はず立上つて柱に手をかけて向ふを見込む。孫右衛門は「サ、」と、右手で制し「それで、つく／＼思ふには」右手を靜かに戻して、首を垂れて少し傾け氣味に「實の親を便にして、もしも忍んで來はせまいか、來たならば何ぼう不便でも養子親への義理

あれば「右手を軽く振り乍ら「かくまふことは扱ておいて、親が縄かけ」左の掌を右手で二度指差し「出さねばならぬ」と、そのまゝ梅川の方へ云ひきかせ「ア、どうぞ来てくれねばよいが、このあたりを」正面向ふを見やり「まい／＼」右手を右前に出して何度も輪を描き、もう一度「まい／＼」と左前で輪を描き「……しやせまいかと、四年このかた逢ひもせず」上手の間へ首をひねり「なつかしい子の顔を」と、もう一度、一間の方へ振返り「見ぬやうに／＼」と、云つて梅川の方へ向き直り「雑行ながら神たゞきも、ノ、コレ」と左の首にはめた數珠（小道具圖解参照）をとり合掌して「不便さからでござる」と、右手を目に當てゝ泣く。やがて數珠を仕舞ふ。

上手の間へ向き直つて、兩手を膝において「義理ある親を牢へ入れ、おめ／＼と逃げ隠れば、末世末代、不孝の惡名所詮逃れぬ命なら」首を垂れ「一日なりと妙閑殿を早う牢から出すのが孝行」と、正面へあごをしやくるやうにして云ふ。忠兵衛は爰で窓の障子を締める。孫右衛門は「サ、」とひさを進め「覺悟極めて」腰を浮かしてのび上り「名乗つて出い」トンと右ひさを立てかけて「名乗つて出おれ」と、云ひ放つ。忠兵衛は一間の襖を明けてトン／＼と駈出るのを、孫右衛門は立上り様、あはてゝ「ア、今ぢやないわい／＼、今のことでは……」と、トン／＼と忠兵衛を押し

戻しトンと、兩手で襖を締めて「ないわい」と、ガツカリとならうとする身體を右手を柱にかけて僅かに支へる。それから坐つて「シタガそれもどうぞ親の目にかゝらぬ所で繩にかゝつてくれ」と泣き乍ら目に手を當て「エ、現在血を分けた子に早う死ね」と顔を正面へまはし「教へるも浮世の義理か是非も……」トンと右膝を立てかけ、脇を脇に引いたまゝ兩手を前に突出した形で一間を見込むが「……なや」トン／＼と下手向きに身をそむけて、靜かに右手を目に當てゝ泣き伏す。

涙を拂つて身體を起し、正面となつて「何故前方に内證でかう／＼した傾城に」右手を前に出して「かうした譯で金が入ると、便宜でもしをつたら」上手へ首をひねり「久離切つても親子ぢやもの」と、右手で自分を指差し「隱居の田地を賣立てゝも」兩手を左右に展げ「首繩はかけまいに、皆おいつが心から」と、梅川の方へ斜に向いてから、一間の方を振り返り乍ら云つて「其の身もせまい苦をしをつて」身を悶へ、梅川の方へ向き直り「いとしほなげに、嫁」と、右手で梅川を指差して、云つて了つてから首を上手へそむけ「……御に迄、思ひも寄らぬ憂目を見せ」と、梅川を哀れげに打見やり「知音」右手を前から大きく右へまはし「近附」同じく左手を大きく左へまはし「親に迄」右袖を出して見、左袖を出して見、左の二の腕を右手で押へて、顔を右から正面へまはし

て来る。「隠れるやうに身をもちなし」上手の間へ向ひ合ひ「ろくな死もせぬやうに此の親は生みつけぬ、憎い奴ぢや」と、一杯のウレヒで二度トン／＼と下を叩いてから、トンと右ひざを立てかけて「憎い奴ぢやと思へども」と堪えるが「可愛うござる」と、たまりかねて下手向きに身體をそむけると、梅川が下手から膝にとりつくので、それを抱くやうにして泣き伏し「……血筋ぞ哀れる」一杯に身體を起し顔を仰向けて、右手で涙を押へる。

「涙の際に巾着より」で、兩手を懷に入れて巾着（小道具圖解参照）を取り出し、中から金包（小道具圖解参照）を出して下に置き、更に紙を出して包み「これは京の御本寺様へ上げやうと思つた金なれど」と、云ひ乍ら梅川の方へ向き直り「嫁と思つて」と、一度差出した金包を引込めて「……やるではない。只今のお禮のため、路銀にちつと」と、遠いところへ往つて下され」と、梅川へ渡し、上手斜になつて前の残りの紙を懷に仕舞ふ。梅川は「逆様ながら戴きます」と、與へられた金包を頂くが、兩手をひさにおいて面を伏せたまゝ顔を上げない。

「大阪を立退いて……」と、梅川のサワリが終つて「此の世の別れにたつた一目、逢うて進めて下さんせ」と、トン／＼と一間の方へ進むので、孫右衛門は驚いて、顔を上げ右手を出して震はせ、梅川の動作を目で追ひ乍ら下手へにじり

寄る。梅川が襖を引き明けやうとするので、起上つて止めてトンと坐らせ「ア、コレ益體もない／＼、たつた今も云ふ通り假令、詞はかはさいでも顔見合したりや繩かけるか」左の掌を、震へる右手で指差し「おれが口から訴人せにや」右手を上によりかさし「養ひ親への義理が立たぬ、何ぼ義理が立てたいとて、親の手づからどう繩がかけれうぞい／＼」と、面を伏せて、手と共にゆるく振る。

梅川は「そんなら顔を見ぬやうに」と、後へまはつて手拭（小道具圖解参照）を以て孫右衛門に目隠しをする。「御不自由にはあらうが、かうさへすれば傍にござつても構ひはあるまい」といふ詞を、盲人の癖のやうに顔は正面に向けたまゝ耳を傾けて聞いてゐて「忝けない」と、右手を出して頂いて軽く頭を下げ「もの云はずと、顔見すと、手先へなと障つたら、それで満足逢うた心」右手で胸を撫で「親子一世の暇乞ひ」と、ウレヒで首を垂れ、それから梅川の肩に手をかけて「必ずそなたの連合ひにもの云はして下さるな」と云ふ。

忠兵衛はトン／＼と駈出で、上手から孫右衛門の膝にとりついて見上げる。「互ひに親とも我子とも」で、目の見えない孫右衛門は兩手で探り當てゝ、上から抱き占め、右から左から頼すり「涙湧き出る水上に」で、梅川は後へまはつて孫右衛門の目隠しをとる。孫右衛門はチラと梅川の方へ振り返るが、そのまゝ、しつかと忠兵衛を抱き占める。